

令和2年度“オール近大”新型コロナウイルス感染症 対策支援プロジェクト研究報告書

企画題目	“オール近大”で、病気の子どもの「子ども時代」を支える 一近大病院で医療に囲われている子どもの発達や教育を保障する技術の提供
研究者所属・氏名	研究代表者：近畿大学病院小児科・上田素子（CLS） 共同研究者：

1. 研究、開発・改良、提案目的・内容

コロナ禍のなか、近大病院にも、家族や社会から引き離されている子どもがいます。すでに成長を遂げた大人と違って、子どもは、ごく限られた「子ども時代」に刻まれた体験を糧に、育っていくものです。ところが日本の病院は、子どもが育つためだけでなく、医療者が医療を施すために造られていることが多く、近大病院も例外ではありません。文系・理系を問わず、総合力に富んだ近大が手掛ける病院として、子どものための医療環境を実現すべく、支援例を提案しました。

2. 研究、開発・改良、提案経過及び成果

本提案は、実現を目指すものではなく、支援例の幾つかについて詳細を報告書にまとめるものとして採択されました。以下に、その例を挙げます。

（支援例1）家族や社会と繋がれる環境

国連は、日本を含む子どもの権利条約の批准国に対し、子どもの権利に及ぼす Covid-19 の影響を考慮するよう求めています。隔離下に置かれた子どもに格差が生じているためです。海外には、病室に設置されたモニターを通じて、自宅と遠隔コミュニケーションが保てたり、家族が子どもの治療スケジュールや検査結果にアクセスできたりする病院もあります。また、子どもに教育を受けさせる義務は日本国憲法にも定められ、緊急事態宣言中も休校が回避されているなか、近大病院は、入院中の子どもに対し、独自の休校措置を課しています。人型ロボットを操り、病室と学校とを繋ぎ、学習を補うシステムは、日本にもありますが、当院では、ネット環境すら整えられないのが現状です。幼稚園から大学まで、幅広く子どもの教育を担う近大として、その病院で暮らす子どもに対しても、子どもの権利を擁護し、教育を保障する必要があると考えます。

（支援例2）痛くない、怖くない、寂しくない環境

多くの子どもにとって、初めての病院は、痛いこと、怖いこと、寂しいことで溢れています。大人の世界に置き換えれば、突然、未知の国へ行けと命じられるような衝撃です。しかし、大人は、前もって地理情報を調べたり、翻訳機を買ったり、医療保険に入ったり、出来る限りの安心を用意して渡航するでしょう。子どもにも、そうした工夫が必要です。例えば、点滴を繋ぐとき、留置針とワンタッチで接続できるルートがあれば、長く抑えつけられず、痛いことが減ります。検査や処置をゲーム形式で疑似体験して学び、作戦が立てられるアプリがあれば、怖さが減ります。一人ぼっちで大きな機械に縛りつけられがちな画像検査も、夢中になれる VR 動画が観られたり、じっとしているとポイントがゲットできるゲームに挑めたりすれば、寂しさが減ります。総合力に富んだ近大の発想や技術が活用されれば、子どもの安心も用意できると考えます。

（支援例3）子どもの発育を促進する環境

子ども本位の環境が整備できなければ、病院は、病気を治療する一方で、発育を阻害してしまうことになりかねません。今、まわりの人の顔がマスクで隠されていることによって、表情の作り方や声の出し方を学ばずに育つ子どもがいます。身体が防護具で覆われていることによって、肌の触れ合いや温もりが感じられずに育つ子どももいます。人と人との関係性を獲得する大切な時期ですから、人らしさが損なわれないフェイスシールドやグローブ等が必要です。また、まだ言葉を覚えている最中の子どもが、元気良く声を出して止められたり、上下や左右を覚えている最中の子どもが、マスクの着け方を間違えて叱られたりもしています。みずから発育しようとする子どもには、抑えつけられることなく、楽しく正しく簡単に感染予防が出来るであろう道具や方策が必要です。これらもまた、近大デザインによって実現できると考えます。

3. 本研究と関連した今後の研究、開発・改良、提案計画

医療者は、医療の専門家であり、人間工学や環境学の専門家ではないため、子どもの目で捉えた理解のしやすさや居心地の良さをかたちにする手法には長けていません。例えば、テーマパークには、様々な仕掛けやバックステージがあるにもかかわらず、ゲストの目にはワクワクするものばかりが優先的に映るように、レイアウトやデザインが施されています。以前、芸術学科とのコラボレーションで実現した処置室は、子どもの視線を意識した空間配置がなされ、痛いことや怖いことが待っていることの多い処置室でありながら、遊びに行きたいと言う子もいます。

学校法人として、多くの子どもや若者の未来を支えてきた近大は、近大病院で「子ども時代」を過ごす子どもの子どものらしさを取り戻すことにより、本当の意味で子どものために創られた医療モデルを生み出す力を持っていると信じています。他部門を巻き込もうとする取り組みは、なかなか採用に至らないのが現状ですが、今後も提案を続けていく所存です。

4. 研究成果の発表等

発表機関名	種類(著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)

5. 開発・改良、提案課題の成果発表等

本提案は、実現を目指すものとして採択されていないため、発表予定はありません。